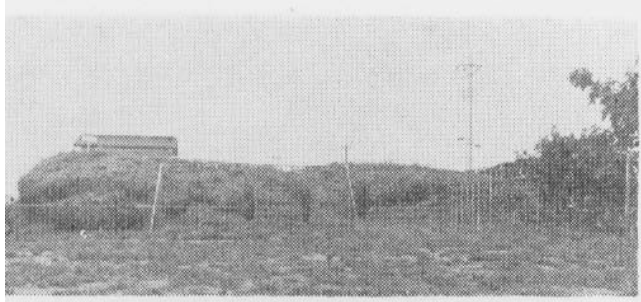


四 酒々井町の古墳

古墳の分布

酒々井町の古墳は前方後円墳七基（三基消滅）、円墳九基、方墳五基、横穴二か所が確認されている。高崎川南側の台地には馬橋鷺尾余古墳、墨古沢古墳、広畑古墳、六所神社古墳などがあるが、いずれも小円墳である。鷺尾余古墳は、東京電力北総変電所建設のため発掘調査されたが、同敷地内の標高二九メートルの台地上にあり、墳丘の高さ〇・六メートル、墳丘長一三メートルの円墳で、墳丘中央やや東側に長さ一・二メートル、幅〇・六メートルの土壌が検出されたが、副葬品は刀子一個のみであった。

高崎川の北岸から印旛沼にいたる台地上には、佐倉市将門二号墳、本佐倉地区の鬼塚古墳、西屋上り古墳、酒々井狐塚古墳と前方後円墳がつづき、やや南へ離れて墨小盛田古墳、尾上平台二号墳（消滅）の二基の前方後円墳と方墳の平台一号墳がある。印旛沼に面しては新堀カンカム口横穴群、低地に築造された上岩橋大鷺神社古墳などがある。（注 墨小盛田古墳はその後の調査で長軸三〇メートル、短軸二三メートル、高さ三メートルの長方墳であることが判明した。）



3-4 鬼塚古墳 本佐倉向台

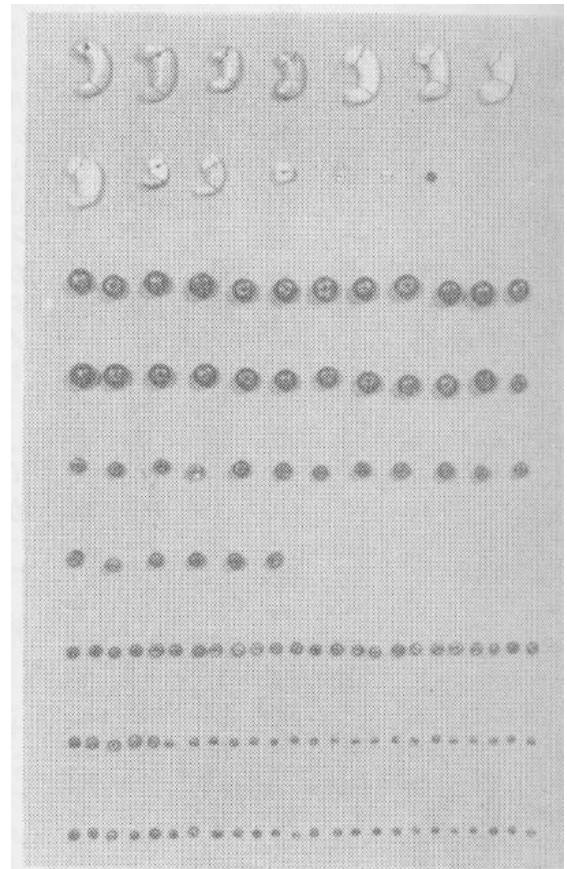
狐塚古墳 狐塚古墳は酒々井町では最大の古墳

で、酒々井八坂神社後方約二〇〇メートルの所にあつたが、国道五一号線バイパス工事のため消滅した。発掘調査した当時、既に周囲は畑の耕作などで削り取られ、古墳の規模は正確に測ることはできなかったが、前方後円墳で主軸の長さは四九メートル、後円部の径三九メートル、高さ三・六メートルあり、くびれ部の幅二九メートル、前方部の最大幅三二メートル、高さ二・六

メートルであつた。主体部は、墳丘東側のくびれ部後円部寄りに横穴式石室が確認されたが、人為的なく乱をうけ破壊されていた。石室は後円部の中心に向かい長さ一〇・三メートルで、羨道部約七メートル、玄室は奥行三・四メートル、幅二・八メートル、高さ一・六メートルであつた。玄室内より瑪瑙製勾玉八、ガラス製勾玉一、方解石製勾玉一の計一〇の勾玉と、ガラス製の小玉二三四が検出され、羨道部のほぼ中央から須恵器の長頸瓶三、台付長頸一、蓋一、刀子、鉄鏃などが出土した。須恵器の型式により七世紀前半のものと思われる。

将門二号墳と鬼塚古墳 佐倉市将門町に所在する将門二号墳は、上本佐倉向台の鬼塚古墳

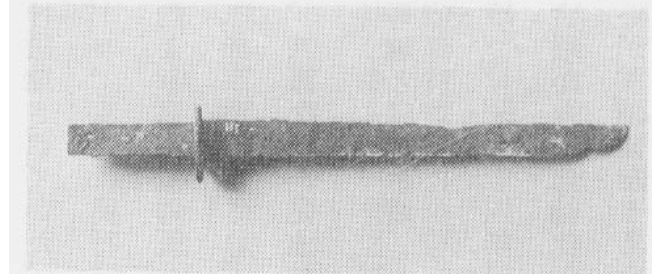
の北西約四〇〇メートルの所にあるが、全長一六メートルの前方後円墳で、昭和一四年民家を建てる際、円筒埴輪、形象埴輪、勾玉、刀子などが出土した。鬼塚古墳からも埴輪片が検出されている。これらの古墳は調査されていないので年代は判明しないが、埴輪をとまうことから狐塚古墳より先行するものであろう。



3-3 狐塚古墳出土の玉類
(酒々井町教育委員会蔵)



3-5 図 カンカンムロ横穴群



3-6 図 カンカンムロ横穴1号墳出土の鉄刀
(北詰栄男氏蔵)

カンカンムロ横穴群

印旛沼を望む酒々井新堀殿島

山の西に面した崖に、七基の

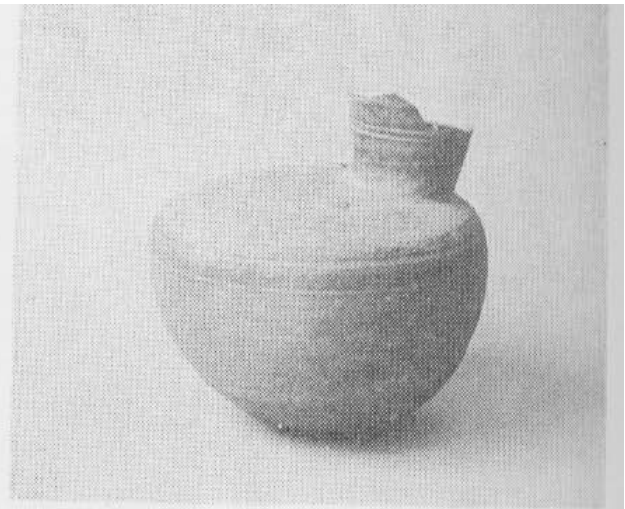
横穴が確認されている。通称カンカンムロと呼ばれ、椀貸し伝説で知られている。横穴は上段に二基、下段に五基穿たれており、下段北端のカンカンムロ横穴一号墳が昭和二二年に調査されている。羨道部は崖崩れのためよくわからないが、玄室は奥行三・二メートル、奥壁幅二・八メートルをはかり、入り口の幅は約一メートルであった。天井の高さは落盤により原形はよく判らないが、中

央部で二・六メートルぐらいと思われ、床は平面で、壁にそって幅九センチメートル、深さ六センチメートルの周溝がめぐっている。床の中央部に、奥壁から一・三メートルのところから入り口に向かって、幅一〇センチメートル、深さ一一センチメートルの溝が掘られていた。奥壁に頭を北にして幼児が一体、中央溝より北壁側には頭を東に向けて成人が一体、南側壁には頭を西に向けて一・二体の成人の骨がみとめられた。

副葬品は、玄室東北壁寄りから瑪瑙製勾玉三、奥壁より北壁にかけて鉄鏃三、奥壁中央部から入り口に向かって六〇センチメートルの所から四四・五センチメートルの直刀、奥壁から一・九メートルの中央溝から銅椀が発見された。銅椀は円形を呈し、落盤により少し変形していたが、径約一三センチメートルある。口縁部は内側に突出し、肉厚は三ミリメートルあるが、底部にむかい一センチメートルほどで極度に薄くなり、〇・五ミリメートルほどになる。また須恵器の平瓶二個が北壁やや羨道部寄りと、南壁中央部より出土した。平瓶は北壁より出土のものは口縁部を欠いているが、頸部と肩から胴部にかけてそれぞれ二条の沈線が施されている。肩部には二個のツمامミ状の突起がつけら



3-8 図 カンカンムロ横穴1号墳南壁側より出土の平瓶 器高14.5cm
(北詰栄男氏蔵)



3-7 図 カンカンムロ横穴1号墳北壁側より出土の平瓶
現存器高18.8cm
(北詰栄男氏蔵)

れて一面に自然釉がかかっていた。南壁より出土のものは、北壁のものより小型ではあるが完形で、口縁部のやや開いた筒形の頸、肩下りで胴部と稜線を画し、素文であることなどから北壁のものより時代が下るものと思われる。追葬の順序をうかがうことができる。初めに幼児が勾玉、直刀、鉄鏃とともに埋葬され、次いで北側、最後に南側に成人が追葬された家族墓と思われる。このカンカンムロ横穴1号墳の年代は、須恵器の形態から七世紀後半から末期にかけてのものとされる。

六世紀末の五九四年には推古天皇により仏教興隆の詔が出され、以後山土地法の有力豪族により氏寺が盛んに建立された。そして地方の豪族にも仏教文化が波及していった。房総でも小櫃川流域の馬来田国造の地に、大和の川原寺と同じ瓦をもつ上総大寺廃寺が建立され、七世紀後半には、竜角寺古墳群の岩屋古墳を築いた氏族によって竜角寺が建立されている。胴椀は仏教文化の影響を受けたものとされるが、新堀カンカンムロ横穴出土の銅椀もこの地への仏教文化の波及と思われるものであり、やがては奈良時代の創建とされる長熊廃寺が酒々井古墳群を築いた豪族の氏寺として、本佐倉の産土様の祀られている本佐倉字南大堀の地に建立されるに至ったと思われる。

大鷲神社古墳

大鷲神社古墳は、上岩橋の祀られている小山で、径三〇メートル、高さ三メートルの円墳



3-9 図 大鷲神社古墳

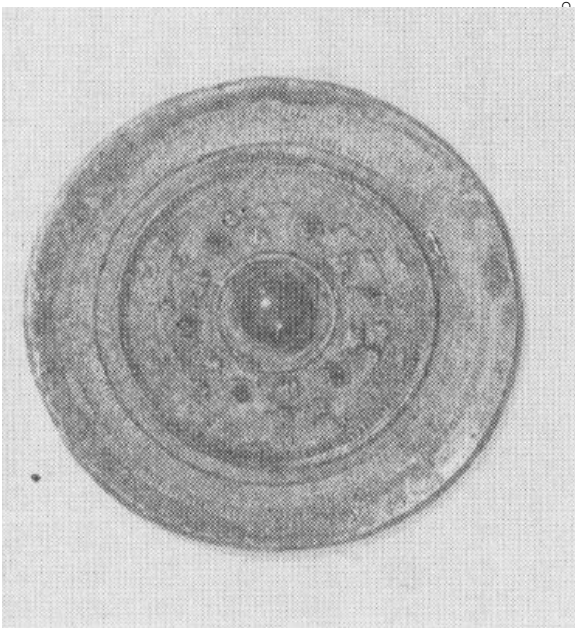
である。印旛沼は鹿島川を大きな水源とするが、鹿島川は佐倉台地の南側を西に向かつて流れ、印旛沼にそそぐ。沼は佐倉台地の北部を南東に向かつてゆるやかに流れて、酒々井町中川地先で流れを北に大きく曲げて北印旛沼につながっていた。大鷲神社古墳は流路を大きく変更する地点の沼に接した低地に所在していて、印旛沼の水運を考えるうえで地形上重要なことにあり、沼周辺の古墳の中で注目すべき古墳である。

沼周辺の低地古墳は、成田市下方字浅間下の丸塚古墳がある。墳丘長三〇メートルほどの円墳であったが、昭和十三年に民家を建てるためとりくずされ、その折、径一七・四センチメートルの三角縁変形神獸鏡一、小鏡三、滑石製管玉一一、ガラス球一二彷彿鑿鏡さあゑが神獸鏡は本本ぞつくられた

され、公津古墳群を築造した印旛国造一族を考えるうえで、丸塚古墳の副葬品は重要である。

大鷲神社古墳からは最近、滑石製石枕（口絵写真真参照）が発見された。この石枕は墳丘上にあつたもので、この古墳から出土したものか、外から持ち置かれたものかは明らかでない。

石枕は石で作られた枕で、詩社を埋葬する際、被葬者の頭の下に置かれたもので、五世紀の古墳に多くみられるものである。昭和五十四年、房総風土記の丘の「石枕展」に於ける調査によると、群馬県から九州まで全国で一〇三例報告されている。このうち房総では佐原市六、神崎町一四、下総町四、成田市八、佐倉市五、八千代市一、印西市二、我孫子市一、千葉市二、市原市三と分布し、酒々井町一を加えて、利根川下流、印旛沼周辺から養老川にかけての地域



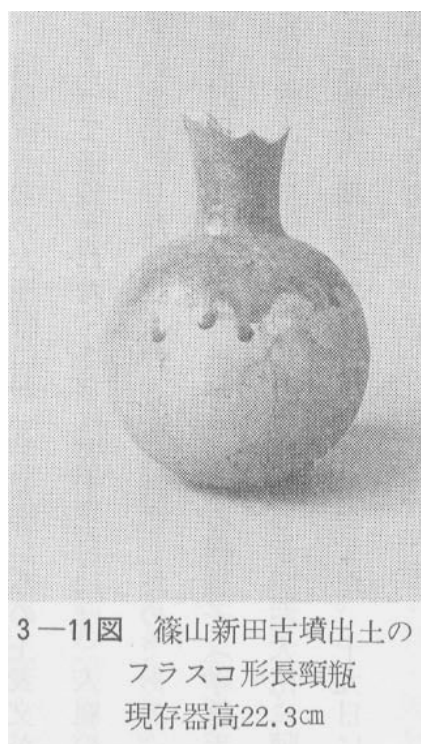
3-10 図 成田市下方丸塚古墳出土の
三角縁変形神獸鏡
(成田山靈光館蔵)

に四七個が集中して発見されている。五世紀代の文化圏、豪族の勢力範囲を示すものである。

柏木・下岩橋・伊篠の古墳

柏木の台地から下岩橋、伊篠にかけての古墳は、宗吾・飯仲古墳群の一部と考えるべきで、成田市域に前方後円墳五、円墳一二があり、酒々井町の地域に前方後円墳

二、円墳五、方墳二、横穴一か所が確認され、合わせて前方後円墳七、円墳一七、方墳二、横穴一か所の古墳群を形成している。



3-11図 篠山新田古墳出土の
フラスコ形長頸瓶
現存器高22.3cm

柏木字長作の台地上に前方後円墳が存在したが、昭和四十年代に土砂採取のため調査されることなく消滅してしまった。横穴は、宗吾参道駅北側五〇メートルほどの下岩橋字内太郎の西に面した崖に三基確認されていたが、崖くずれのため消滅してしまっている。篠山新田の小円墳は、昭和二十年代に畑造成のため墳丘をくずしたところ、墳丘をはずれたところから雲母片岩の石棺が出土し、須恵器のフラスコ形長頸瓶が数点発見された。この古墳の築造年代は須恵器の編年から七世紀末のものと思われる。